

シュタイナーの『ファウスト』論 —『ファウスト』解釈に秘められた「自由」の哲学—

井藤 元

はじめに一試金石としての『ファウスト』

本研究は、シュタイナー教育思想の基礎的研究の一端として、彼の人間形成論の構造的解明を試みるものである。その際、考察の対象とするのが、彼の『ファウスト』論である。『ファウスト』論は以下に詳述する通り、シュタイナー思想への接近を可能ならしめる恰好の足場を与える。

ゲーテの『ファウスト』については、その解釈だけで「多くの図書館を満たすことができる程、膨大な文献が存在している¹⁾」。ところが、シュタイナーにとって、従来の『ファウスト』解釈の多くは、抽象的思考によって作品の豊かさを殺しているように感じられた。彼は、そうした諸々の解釈を「ファウストの亡骸」として断罪し、人智学的認識に満たされなければ『ファウスト』を正しく理解することはできないと断言している²⁾。シュタイナーは、人智学的認識によってこそ、作品は生きた解釈に開かれると述べ³⁾、実際にその方法を用いて『ファウスト』を読み解いた。

尤も、本論はシュタイナーの『ファウスト』解釈を読み解くことで『ファウスト』の真意を追求するものではないし、また彼の『ファウスト』解釈の妥当性を論ずるものでもない。本論にとって彼の『ファウスト』論はあくまで、シュタイナー思想を読み解くためのテキストである。

『ファウスト』は、無数の解釈を許すが故に、しばしば解釈者自身の思想を映し出してしまう。事実、後述する通り、シュタイナーはファウストの形成過程を人間形成のプロトタイプとみなしており、『ファウスト』のうちに人智学的人間形成論の基本的構図を投影している。そして、人智学における諸々の重要問題（「悪」や「自然科学」の位置づけ、「自由」の内実など）を、『ファウスト』に沿って解き明かした。

従って、シュタイナーが『ファウスト』のどのような点に着眼し、そこにいかなる解釈を与えたかを読み解くことは、シュタイナー思想を解き明かすことと同義と考えられるのであり、この意味において『ファウスト』論は一つの試金石となる。

本論考では、彼の『ファウスト』論を人智学と我々の間の緩衝地帯として位置づけ、これを読み解くことを通じて可能な限り、人智学へと接近したい⁴⁾。そうした媒介なくして直接、シュタイナー思想へと従来の理論枠組みで臨むならば、我々は容易にその足場を見失ってしまう。本研究では、『ファウスト』を経由することで、人智学的世界観の刺激を緩和することを課題として設定し、とりわけ人智学の最重要問題である「自由」の内実の解明を試みる。

以下、『ファウスト』論の具体的分析を行うが、その前段階として、予め、シュタイナーにおける『ファウスト』論の位置づけを確認しておく。

1. 『ファウスト』論の位置

周知の通り、シュタイナーは思想家としての歩みの第一歩を、ゲーテ研究者として踏み出した。

彼は、キュルシュナー版『ドイツ国民文学叢書』中のゲーテ自然科学論文の編集の仕事を依頼されて以降、1886年に処女作『ゲーテ的世界観の認識論要綱』を出版し、1897年には初期のゲーテ研究の集大成ともいえる『ゲーテの世界観』を世に送り出した。彼はそうした過程で、ゲーテのうちに自身と同一の思想的傾向性を見出し、ゲーテ思想への深い傾倒と共鳴の下、諸々の論文を執筆した。この点についてコリン・ウィルソンは「彼[シュタイナー 註:筆者]はルドルフ・シュタイナーとして、自ら語っているのではなく、いわばゲーテの代弁者として語っている⁵⁾」と述べているが、自身の世界観とゲーテのそれとの通底を発見した彼は、ゲーテを通じて、間接的に自らの問題を語っていたのである。世紀転換期以前、20代半ばから30代にかけてのシュタイナーは、靈的指導者となって以降（40歳以降）の彼とは異なり、思想研究者として堅実な研究を行っている。

ゲーテ研究の過程で、シュタイナー自身の世界観がゲーテの認識論に合致することが明らかになった⁶⁾。1923年に記された『ゲーテ的世界観の認識論要綱』、「新版の序」で、彼は初版の出版当時をそのように振り返っている。

そうした思想研究者時代のゲーテ研究は、シュタイナー自身が強調しているように、決して靈的指導者となって以降の彼の思想と矛盾するものではなく、それどころか人智学の思想的地盤として位置づくものである。

「今日それ[『ゲーテ的世界観の認識論要綱』 註:筆者]を再び私の前に置くと、それはまた、私がのちに語り、出版してきたすべてのことの認識論的基礎づけであり、弁明であるように思われる⁷⁾」。

思想研究者時代のゲーテ研究は、確かに靈的指導者となって以降に通ずる思想的萌芽を内包している。しかしながら、それはあくまでも萌芽に他ならず、そこで人智学的理念が論じつくされているわけではない。シュタイナーの思想（人智学）をより十全に反映しているのは、靈的指導者となって以降のゲーテ研究、すなわち、ゲーテの文学論（『メールヒェン』論、『ファウスト』論）である。思想研究者時代の著作『ゲーテの世界観』、「新版のためのあとがき」で、彼はそのことを示唆している。

「とりわけ精神科学的な見地から、ゲーテについて言われるべき多くのことは、『ゲーテのファウストと緑の蛇の童話』に関する私の著書の中に見出される⁸⁾」。

ゲーテの『メールヒェン』論、並びに『ファウスト』論を分析することにより、靈的指導者シュタイナーの精神様式が明らかとなる。シュタイナーの『メールヒェン』論に関しては、既に拙稿にて分析を試みた⁹⁾。そこで、本論では特にシュタイナーの二つの『ファウスト』論を考察対象に据える。両論文は『メールヒェン』論と共に、シュタイナー全集第22巻に収録されている。

その一つが「秘教的な世界観の像としてのファウスト」（1902年、以下『ファウスト』論Ⅰと略記）である。これについては、本論文後半で、主に『ファウスト』第二部に言及する際に参照する。

そして二つ目の論文が「『ファウスト』を通じて開示されたゲーテの精神様式」（以下『ファウスト』論Ⅱと略記）である。本論考は、『メールヒェン』論・加筆修正論文（「緑の蛇と百合姫のメールヒェ

ン」を通じて開示されたゲーテの精神様式」)の出版と同年(1918年)に発表された¹⁰。『ファウスト』論Ⅱと『メールヒェン』論・加筆修正論文は、題目を一目して明らかな通り、その作品名の箇所以外完全に同一である。両論が同一の問題圏を扱っていることは、その題目の一致からも窺える。

そうした霊的指導者シュタイナーのゲーテ研究には、初期のゲーテ自然科学研究では射程圏外であった諸問題が検討されている。事実、上記二つの『ファウスト』論では、「悪」や「自由」の問題など、彼の自然科学研究で決して論じられることのなかった(しかしながら人智学にとって重大な)問題が考察の対象となっている。

『ファウスト』論分析により「精神科学的観点」に立ったシュタイナーのゲーテ理解が明らかとなるだけではない。先に記したとおり、『ファウスト』解釈を通じて、逆に人智学的諸理念の内実を把握することが可能となるのである。この意味において、霊的指導者シュタイナーのゲーテ論の意義は甚大である¹¹。

しかしながら、そうした意義を有するにもかかわらず、『ファウスト』論について主題的に論じた研究は管見の限り見当たらない。アレンは、『メールヒェン』論については、これを人智学の基盤として位置づくものとみなし、分析を行っている¹²。ところが、『メールヒェン』論と対をなす『ファウスト』論に関しては、一切検討がなされない。また、『ゲーテとシュタイナー』を著したフリーマンは、『ファウスト』自体には言及しているものの、『ファウスト』論に配視するには至っていない¹³。ケプケは、ゲーテ、シラーと人智学の関係について、440頁にも及ぶ考察を行っているが、『メールヒェン』論への言及はみられるものの、なぜか『ファウスト』論には言及していない¹⁴。シュタイナーが『ファウスト』解釈を試みていたことが伝記的事実として取り上げられることはある。けれども、『ファウスト』論そのものの意義に着眼した研究は皆無に等しいのが現状なのである。

さて、『ファウスト』論を読み解くにあたって、本論では特に、人智学におけるいくつかの重要問題に焦点を当て、分析を進める。すなわち、一、人智学的人間形成論において、人間はいかなる形成過程を辿るのか。二、なぜ「悪」が必要なのか、なぜ「科学」が必要なのか。そして、三、人智学的「自由」とは何か。

以下、まずは『ファウスト』第一部についての分析がその大半を占める『ファウスト』論Ⅱから検討を行う。議論の骨子を明瞭にするため、『ファウスト』の粗筋については、註にて補足的に説明することにした。適宜参照されたい。尚、上記一から三の問題は、それぞれ、第二節から第四節の内容と呼応している。

2. 「ファウスト」を人智学的人間形成のプロトタイプと見る

シュタイナーは『ファウスト』全体の構造をどう捉えていたか。彼はファウストのうちに人間の形成プロセスのプロトタイプを見た。ファウストが歩んだ過程こそ人智学的人間形成の典型と見ているのである。

シュタイナーの人間形成論は、人間の「マクロコスモス(Makrokosmos)からの離反」から始まる。マクロコスモスの働きとは、万物を調和せしめる超感覚的世界の働きである。ファウストはそうした必然性、永遠性の世界に背を向ける。『ファウスト』第一部は、マクロコスモス(全世界の包括的調和)から離反してゆくファウストが描かれているというのである。

第一部「夜」の場面¹⁵。彼はノストラダムス自筆の大宇宙の標を開き、天地の偉大なる作用をなが

めて感嘆する。マクロコスモスのしるしを通じて、全世界の包括的調和が、ファウストに開示される。彼はそこで、すべてのものが全体的関連性において存在しているということを目の当たりにし、あらゆるものが必然的に相互関連的に調和していることを確認する。

「しかしながら、ファウストは、この万物の調和説の中には、彼が得ようと追い求めた彼の精神の体験を感じることはできない¹⁶⁾。大宇宙の壮観は、ファウストにとっては、単なる見物 (Schauspiel) にすぎない。彼は落胆する。「なんとという見物だ！しかしながら、ああ！見物たるにすぎぬ！¹⁷⁾」学者から抜け出ようとするファウストにとって、マクロコスモスの単なる観照だけでは意味がない。かくして、ファウストは超感覚的世界から離反してゆくことになる。

では、彼はどこへ向かうのか。シュタイナーによれば「大地の精 (Erdgeist) の象徴」に向かう¹⁸⁾。ファウストは、「生の像 (Bild des Lebens)」を欲せず「生それ自体 (Leben selbst)」を欲した。それゆえに、彼は、絶えず生命を生み出し、大地を支配する地霊の方を向く。

そして、メフィストフェレスの力を借り、感覚的世界における生命の充溢を体験する。グレートヒエンとの恋愛は、その最たるものであった。

ところが、『ファウスト』第二部において、彼は再び反転する。第一部冒頭でマクロコスモスの作用から離反したファウストは、第二部クライマックスにおいてあらためて反転し、マクロコスモスに還ってゆく。今や「その見物は人生になった (Es wurde Leben) ¹⁹⁾」。マクロコスモスの調和的作用と彼の人生が一体化する。ファウストは彼の内面における人生の闘争を通じて、全宇宙の一員として戦い、そしてその争いを引き受けつつ弛まぬ努力を続け、ついにはマクロコスモスとの一致を果たして、物語は幕を閉じることになる。

こうして、シュタイナーの解釈に倣えば、ファウストの辿る道程は大きく三つの場面に分かれる。
①単なる観照としての超感覚的世界。②感覚的世界への沈潜。③超感覚的世界との神秘的合一の実現。

このプロセスを補助線とすることによって、考察の焦点を以下のように見定める。第一は、何が「①単なる観照としての超感覚的世界」から「②感覚的世界への沈潜」への転換を可能にするのか。ここに「悪」の問題が生じる。人智学においては、人間を感覚的世界に繋縛することこそ「悪」である。では感覚的世界は避けるべきではないのか。なぜそれが必要になるのか。

第二は、何が「②感覚的世界への沈潜」から「③超感覚的世界との神秘的合一」への転回を可能にするのか。ここに科学 (Wissenschaft) の問題が生じる。とりわけゲーテ自然科学研究における「知恵 (Weisheit) の問題。シュタイナーが「知識」こそ「永遠性の領域」の「鍵」という時、その「知識」とはいかなる特質をもつのか。

そして第三に、「悪」と「科学」の先に「自由」の問題が生じる。シュタイナー哲学の根本問題であり、シュタイナー教育の最重要課題でもある「自由」の獲得の問題。人智学的人間形成論において「自由」はいかにして獲得されるのか。そして、「自由」の獲得過程に「悪」や自然科学はいかに関連しているのか。そうした根本問題について、ゲーテ的世界観の中で論ずること、それが以下の課題ということになる。

3. なぜ「悪」が必要なのか、なぜ「科学 (Wissenschaft)」が必要なのか

A. 「悪」—感覚的世界の体験が必要であるが、しかし「悪」である

本節では、①から②の行程を明らかにするための前提として、まずはシュタイナーにとっての感覚

的世界の位置づけを明らかにする。一般に超感覚的世界の重要性を説いた思想家として知られるシュタイナーにとって、感覚的世界とはいかなる意義を有するのか。それは脱却すべき、悪しき世界なのであろうか。『ファウスト』論が示しているのは、むしろ、人間にとっての感覚的世界の重要性である。

『ファウスト』第一部冒頭へと目を向けよう。先に述べた通り、超感覚的世界の単なる観照に飽きたらず、そこから離反したファウストにとって、より近しいと感じられるのは地上界を支配し、諸々の生命の営みにいそむ地霊である²⁰。そこで彼は「おれはどれほどお前に近しく感じていることか²¹」と地霊に呼びかける。しかしながら、地霊は「おれに似てはおらぬ²²」とファウストをはねつけてしまう。地霊の司るような偉大な活動は、ファウストの憧れであるが、実際の彼は到底そのような境地に達してはいないのである。

「お前には似ない！では誰に似ているのか？²³」

シュタイナーは、ファウストがこの問いを発した瞬間に、弟子のワグナーが部屋に入ってくるという事実を目を向ける²⁴。そして、このワグナーこそが「誰に似ているのか？」への回答だという。すなわち、ファウストは、根本的にワグナーと同類と解釈されるのだ。あらゆる学問に通じた天才ファウストは、あろうことか認識の質においてはワグナーと同等とみなされるのである。

そうした解釈のうちには、シュタイナー自身の知識観が如実に現れているように思われる。万学を修めたファウストと、彼の弟子ワグナーを比較した場合、知識の量的比較において、ファウストがワグナーを圧倒していることは確実である。しかしながら、それはあくまで量的差異であり、両者は同一次元に立脚していると考えられるのである。そうした『ファウスト』解釈から、シュタイナーが人間の形成過程において知的認識能力の拡大とは別次元の根本的転換を要求していたことが予想される。その根本的次元転換に際し、まずもってファウストに必要なのは、生命の充溢に満たされる体験である。この点に関しては、続く「市門の外」²⁵の解釈のうちに如実に現れ出ている。

「以前には、彼の抽象的な認識の努力の傍らを空しく通り過ぎていた物事（すなわち、素朴な心情の人々の復活祭と復活祭の散歩）に対し、生活が彼の精神の前で魔法をかけることだけが、彼の魂をこの感情の最終的な結論から救い出す²⁶」。

感覚的世界への沈潜によって、ファウストは「感情の最終的な結論」、すなわち、自殺という結論から救い出される。ファウストにとって必要なのは、感覚的世界の躍動に浸る体験である。

ファウストは体験なき単なる観照、ワグナー的知的拡大を唾棄し（マクロコスモスの作用がいかに偉大であっても、それが単なる見物ならば彼にとっては意味がない）感覚的世界の回復を追求する。

では、ファウストにそうした体験をもたらすものとは何か。シュタイナーはその存在こそ、悪魔メフィストフェレス（以下、メフィストと略記）であるという。メフィスト解釈を通じて、シュタイナーが「悪」をいかに捉えていたかが浮き彫りにされる。

人智学における「悪」の位置づけ

マクロコスモスの作用に背を向け、知的活動に大きく偏向しているファウストに、まずもって必要

なのは、感覚的世界の躍動、生命の充溢に触れる体験である。そうした体験をファウストにもたらず存在こそ、悪魔メフィストである。以下で詳述するが、人智学において「悪」は人間を感覚的世界に繋縛するものである。メフィストは超感覚的世界から離反したファウスト(①→②)に感覚界を堪能せしめる存在である(②への沈潜)。

ファウストがメフィストと契約を交わしたのちに、一人の大学生がファウストを訪ねてくる。この場面では、ファウストにとってのメフィストの存在意義が顕著に現れている²⁷。学生は「地上のことも天上のこともすっかり理解したい²⁸」とメフィスト扮する偽ファウストに訴えるのであるが、メフィストは知識欲旺盛な学生に対して「特に、女の操縦術を学びたまえ²⁹」と促し、「すべての理論は灰色で、緑なのは生の黄金の樹だけなのだ³⁰」と説く。

この場面についてシュタイナーは、「メフィストが学生にけしかけることは、ファウストによっても経験されねばならない³¹」と述べ、「それは墮落ではない *Das ist nicht der Fall*.³²」と断言する。すなわち、感覚的世界を謳歌することは、これまで知の追求のみに邁進してきたファウストにとって、必要不可欠なことであり、それは決して「墮落ではない」。生命の躍動、生命の充溢を体験することは、ファウストにとって必要な過程なのである。

かくして、第一部においてファウストはグレートヒエンと出会い、彼女との恋愛を通じて感覚的世界に沈潜することとなる。その際、グレートヒエンとの恋愛を可能にしたのは、メフィストという装置であった。

こうした『ファウスト』解釈から、シュタイナー思想における感覚的世界の位置づけが示される。超感覚的世界の実在を認め、その重要性を説いたシュタイナーは、ともすれば、感覚界からの脱却、感覚界の否定を訴えた思想家とみなされるかもしれない。しかしながら、彼は決して、感覚界を克服すべき悪しき世界と捉えていたのではなかった。感覚界の謳歌は、ファウストにとって不可欠の体験なのであり、この体験こそが後述する通り、彼を次なる段階(「自由」の獲得)へと導くものとなる。

では、人智学的観点から読み解く場合、メフィストの正体とは何か。このメフィスト解釈のうちに人智学における「悪」の内実が色濃く表れている。

実は、シュタイナーは「悪」に二つの働きを見ていた。「悪」の霊的存在、ルシファー(Luzifer)とアーリマン(Ahriman)である。前者は人間の感情を地上的なものに向けさせ、さまざまな欲望や情欲を生じさせるものであり、後者は、地上に存在する物質的なものが現実のすべてだと思い込ませる。両者はいずれも人間を感覚界に縛り付ける存在である。後者の最たるものである「知識」の働きは、生命を切り刻み固定させる。干からびた知識に象徴されるような博識である。前者は、生の働きを過剰にさせ、人間を感覚的欲望の充足に駆り立てる働きをする³³。

シュタイナーはそうした人智学的「悪」の問題をメフィストのうちに投影させ、彼のうちに相矛盾する二つの霊的存在の混在を見て取った³⁴。

例えば、第一部「天上の序曲」で、メフィストは「私のいちばん好きなのは、むっちりした生きのいい頬ぺたなんです。死骸ときたら私はご免こうむりますよ³⁵」といい、ルシファーの様相を呈している。第二部(11760行)でメフィストが天使の美しい頬にみとれ、これを愛する場面においても、そうした傾向は見られる。対して、第二部の結末で、メフィストはファウストの死骸を求め、ここにおいて、メフィストはアーリマン的傾向を示すというのである³⁶。

メフィストを二つの「悪」なる存在の混在として読み解くというシュタイナーの解釈は、極めて特

異なるものであり、我々の常識的観点からすればおよそ異質な理解である。本研究では、人智学的な世界観の刺激を、ゲーテを経由することで緩和することを一つの課題として設定した。従って、人智学の世界観を余すところなく捉えることを目指すものではない。人智学と我々の間の緩衝地帯として『ファウスト』論を位置づけ、その分析を通じて可能な限り、人智学の世界観を把握することを本務としている。従って、ルシファー、アーリマンそのものの内容を深追いすることは、本研究の射程圏外である。あくまでも、緩衝地帯である『ファウスト』論に留まり、人智学の世界観をゲーテによって語りうる範囲に限って分析していくことにする。

このように問いを限定した上で、しかしながら、シュタイナーにおける「悪」の位置づけが、彼のメフィスト解釈を通じて浮き彫りになる。シュタイナーにとって「悪」とは人間のうちに先天的に内在している二つの傾向性そのものを指すのである。すなわち、感覚的欲望と分析的思考に駆り立てられるという二傾向が「悪」の根源として位置づけられる。

これは不可避の事態とみなされるのであるが、そのことは何も、我々に負の作用だけをもたらすのではない。それら二傾向は、人間に「自由」を与えるための必須の要素でもあるのだ。なぜなら、もし「悪」の存在がなければ、我々は感覚的世界において個別的自我を確立できないからである。

けれども、人間は、「悪」によって与えられた自由（この自由はマクロコスモスの作用から分離されている故に、真の自由ではない）によって感覚界に留まり続け、その享楽に溺れてはならない。

そこから脱し、再び永遠性の領域へと目を向けねばならないのである。感覚的世界において個別的自我を確立しつつ、「③超感覚的世界との神秘的合一」に至る。そうしてマクロコスモスの作用と調和してはじめて、我々は真の「自由」を獲得するとされるのである。シュタイナーによれば、『ファウスト』第一部から第二部への決定的な転換は、後者において、ファウストが「永遠性の領域」（ファウストが冒頭で背を向けた超感覚的世界）へと向かっている点にある。

さて、ここにおいて、「②感覚的世界への沈潜」から「③超感覚的世界との神秘的合一」へといかに転回するかが問題として浮上する。ここで鍵を握るのが科学（Wissenschaft）、より具体的にはゲーテの自然科学である。シュタイナーは「生命の働き（ルシファー）」と「知識の働き（アーリマン）」、いずれか一方が過剰になることを悪しき事態とみなした。『ファウスト』第一部が示しているように、知的向上に偏重するものにとって、「生命の働き」に触れる体験が必要であった。

シュタイナーにとって、「生命の働き」と「知識の働き」、両者が均衡を保ち、両者の調和が達成された知こそ、「ゲーテ自然科学の知」である。ゲーテ自然科学は、概念によって生きた自然を切り刻むものではない。ゲーテ的知は生ける概念ともいうべきものであり、それは、「③超感覚的世界との神秘的合一の実現」に寄与するとされる。

このことを示すべく、次節ではシュタイナーの『ファウスト』第二部の解釈（『ファウスト』論Ⅰ）を参照することにする。

B. 知恵（Weisheit）としての「科学」—ゲーテ自然科学が感覚的世界と超感覚的世界を架橋する

第一節で示したとおり、シュタイナーは思想研究者時代、主にゲーテ自然科学研究に従事し、これを入智学の基盤として位置づけるものと捉えたのだが、それはいかなる意味においてか。

シュタイナーは、第二部でのヘレナを得たいというファウストの願望のうちに、彼の永遠性への志向を読み取っている。この志向によって、ファウストは感覚界の呪縛から解放されることとなる³⁷。

彼は「母たちの国 Reich der Mütter」へ赴き、ヘレナを現実世界に連れ出す。「母たちの国」にはすべての存在の永遠の原型が保存されている。そこでファウストは、ヘレナを発見することができるというのだ。

しかしながら、メフィストは、ファウストをこの「母たちの国」にまで導くことができない。なぜならメフィストは、「永遠性の領域」にとってよそ者だからである。メフィストの有する性質は先に見たとおり、人間を感覚界に縛り付ける傾向性を有するものである。それ故にメフィストは、「永遠性の領域」とは無縁の存在である。彼はファウストに「母たちの国」への「鍵 Schlüssel」を与えることができるだけである。「メフィストと同じくらい物質性の中に生きている人にとって、母たちの子宮の中の永遠性は、最も疎遠な領域にすぎない³⁸」。

では、このメフィストから手渡される「鍵」とは何を意味するのであろうか。ファウストは、この「鍵」でもって「母たちの国」に行くことができる。シュタイナーはその「鍵」を「科学(Wissenschaft)」として読み解く。

「人はさらに多くの知識(Wissen)を蓄積することができるけれども、「物事の本質」、すなわち母たちの領域は彼に閉ざされたままである可能性がある。しかしながら、知識の中で、人は根本的には、精神世界(Geistesreich)への鍵を手に入れている。知識は博識(Gelehrsamkeit)か知恵(Weisheit)のどちらかになるだろう³⁹」。

もし我々が(先に挙げたワグナーのごとく)知識を単に博識(Gelehrsamkeit)として蓄えるならば、精神世界への道は絶たれる。「賢い人が、単なる物知りか蓄えた「乾いた知識 trockene Gelehrtenstoff」を、かき集めるならば、彼は他の人[永遠の世界に住む人 註:筆者]にとって最も異質な領域に導かれる⁴⁰」。この点についてシュタイナーは自伝において次のように述べている。

「認識における一面性は、単に抽象的な錯誤への動因ではない。人間界に錯誤、誤謬をもたらす存在と霊的に交流することになるのだ⁴¹」。

「人間界に錯誤、誤謬をもたらす存在」とは「悪」の霊的存在、アーリマンのことである。アーリマンは、「世界は機械にちがいない」ということを絶対的真理とせしめる存在である。従って、乾いた知識の蓄積としての博識は、「悪」との霊的交流へと通ずるものと考えられているのである。

ところが、もし我々が知識を「知恵(Weisheit)」として結実させ、それを「永遠性の領域」への「鍵」とみなすならば、我々はこれにより、超感覚的世界との合一を可能にする通路が得られるというのである。シュタイナーにとって知恵(Weisheit)とはまさに「③超感覚的世界との神秘的合一」を果たす上で、(文字通り)鍵を握るものと位置づけられるのである。従って、知識が博識(Gelehrsamkeit)となるか、知恵(Weisheit)となるかは決定的に重要な問題となる。前者は精神世界を閉ざし、後者はその世界を拓く。前者は悪(アーリマン)との交流に通じ、後者は永遠性の領域へと通ずる。知識は、それに対する態度によって、前者にも後者にもなりうるのである。第一部冒頭のファウストは、確かにあらゆる知識を有していたが、それはあくまで前者の意味においてであった故に、克服されるべきものであったのだ。

そして精神世界へと通ずる知恵（Weisheit）を与えるものとは、シュタイナーにとってより具体的には、ゲーテ的自然認識に基づく知であった。シュタイナーは『ファウスト』第二部、「古典的ワルプルギスの夜」において、ゲーテが自らの自然認識に基づき、感覚的世界と超感覚的世界を架橋したと解釈する。この点については『ファウスト』論Ⅰに言及がある。

「ゲーテは、彼の自然科学的世界観によって、橋—それを渡って彼は人間の発展の中に世界的出来事をもたらしうる橋—を建造した。彼はそれを「古典的ワルプルギスの夜」において行った。「古典的ワルプルギスの夜」の詩的価値は、ファウストのこの領域において、ゲーテはあまりにも完全に自然観を芸術的に克服することに成功しているので、それらの中に概念上の抽象的な残骸は何も残っておらず、すべてのことがイメージ、すなわちファンタジーにかなった像の中に流れ込んでいるということを完全に見抜いたときはじめて認識される⁴²」。

「古典的ワルプルギスの夜」では、科学的学識と芸術の美的統合が果たされていることで、感覚的世界と超感覚的世界の架橋が達成されている。そこで描かれているのはまさに「永遠性の領域」へと通ずるものとしての自然科学的知である。

そうしたシュタイナーの解釈のうちには、ゲーテ自然科学研究から出発し、科学的な知の重要性を説いた彼の精神様式が端的に現れているように思われる。シュタイナーは決して、超感覚的世界の重要性のみを訴え、あらゆる科学的知識を否定したのではない。自然科学の知は、我々に超感覚の世界との合一をもたらす「鍵」を与えるものとされるのである。とりわけ「③超感覚の世界との合一」へと導く「知恵（Weisheit）」を与えるものこそ、まさにゲーテの自然科学研究であった。

彼の『ファウスト』解釈から、シュタイナーにとってゲーテ自然科学研究が、超感覚的世界への通路を開くための不可欠の存在であったことを窺い知ることができる。彼の初期のゲーテ自然科学研究が人智学の基盤として位置づくことも、この意味において理解されるべきである。ファウストは、感覚的世界から、超感覚的世界へと次元転換を果たすのであるが、これを可能にする「鍵」は、まさに感覚的世界の只中にあるのである。

4. 人智学的「自由」とは何か—マクロコスモスと調和する「自由」

第一部におけるグレートヒェンへの愛は、感覚的なものである。第二部におけるヘレナへの愛は最も深遠なる神秘主義的経験の象徴である。第一部から第二部にかけて、ファウストは感覚的世界から超感覚的世界へと次元転換を果たしたことになる。

その転換が、人智学における「自由」の獲得プロセスにおいてもみられる。人間が真の「自由」を獲得するためには、反転するダイナミズムを必要とする。それによって「自由」の意味内容が転換しなければならない。

第一部冒頭で、ファウストはマクロコスモスから離反した。「悪」の作用によって、ファウストは感性界に耽溺し、永遠なる世界の存在を忘却してしまう。人間は「悪」の作用によって不可避免地に感覚的世界に繫縛される。けれども、このことは人間に負の作用をもたらすわけではない。シュタイナーはマクロコスモスへの単なる盲目的追従を「自由」とはみなさない。自らの意志でもってマクロコスモスと調和するのでなければ、真の「自由」とはいえない。従って、感覚的世界における個別的自我

の確立のために、人間は、一度マクロコスモスから離反せねばならないのである。

しかしながら、我々はその所に留まってはならない。感覚的世界から抜け出して、あらためて「超感覚的世界の作用と一体化」しなければならない。②から③への転回が求められるのである。ところが、不思議なことに、その転換に寄与するのはメフィスト（悪）そのひとである。先に「超感覚的世界」からの離反を促したそのメフィスト（悪）が、今度は、「③超感覚的世界との合一」をもたらす。

それは「知恵（Weisheit）」によってである。メフィストは「超感覚的世界」へと導く「鍵」＝知識を人間に与えることによって、「超感覚的世界との合一」を促す。シュタイナーにとってこの場合の「知恵」とは、とりわけゲーテ自然科学研究の知を指していた。「乾いた知識」を手にしたところで、超感覚的世界は閉ざされたままである。ゲーテ自然科学研究に代表される生きた概念を与える知恵こそが、我々を「③超感覚的世界との神秘的合一」へと導く。

つまりメフィストは、この意味において二重の役割を果たす。一面においては人間を「②感覚的世界」に導き入れ、他面においては、「③超感覚的世界の合一」へと導く存在なのである。

かくして感覚的世界を経て獲得されたマクロコスモスとの調和状態こそ、シュタイナーの目指す真の「自由」である。その「自由」は単なる観照に留まらない。そして我々が単に欲望を充足させることが出来るという、その意味での自由でもない。感覚的世界において個別的自我を確立し、その上でマクロコスモスの作用と一体化するのでなければ、真の「自由」とはいえないのである。

③の段階で、ファウストは感覚的世界を体験している。感覚的世界における不自由も知っている。その上で、あらためて、感覚的世界から離れ、マクロコスモスの働きと調和し一体化する。その時、ファウストの「自由」は、マクロコスモスの働きを妨げない。マクロコスモスの働きも彼の「自由」を妨げない。観照が経験で満たされ、「その見物は人生になった⁴³⁾」のである。

そうした一連の「自由」の獲得プロセスは、『ファウスト』論のみならず、彼の霊的指導者時代の諸論考でも強調されている構図である。一例として『ファウスト』論Ⅰ発表の前年（1901年）に出版されたテキスト『近代の精神生活の黎明期における神秘主義及びその現代的世界観との関連』を取り上げよう。そこで述べられていることは、『ファウスト』論で論じられた「自由」の観念といかに合致することか。シュタイナーは、「自由な行いは、普遍的自我（allgemeines Ich）より流れ出る⁴⁴⁾」と述べ、「自由」な行為をマクロコスモスとの調和から発する行為として捉えている。彼は、人間が個人として為す行いは不自由であるとし、彼自身の行為が普遍的存在の行為となる時、我々に真の「自由」がもたらされると述べている⁴⁵⁾。孤立した自我を脱し、普遍的存在と調和することができて初めて、真の「自由」が獲得されるというのである⁴⁶⁾。そしてそうした「自由」を獲得するならば、我々は世界と自分との間の矛盾を解消することができるというのである⁴⁷⁾。

個別的自我を脱け出て、最終的に普遍的自我と一体化するという過程は、まさに（シュタイナーが読み解く）ファウストの発展過程と同型である。上で明らかにした「自由」の獲得プロセスは、シュタイナーの諸論に通底する基本構図とみなすことができるのである⁴⁸⁾。

本論文では、具体的形象たる『ファウスト』のなかで人智学的人間形成論の内実を捉え、シュタイナー教育の最重要問題である「自由」の獲得過程を浮き彫りにさせた。『ファウスト』という足場によって、「悪」、「自然科学」といった人智学的重要問題との関連で「自由」の内実、及び位置づけが明らかとなり、同時にそれら諸要素の緊密な連関も示されたように思われる。

しかしながら、本論考での分析を通じて、ゲーテの世界観を超え出る問題にも直面することとなっ

た。とりわけ、第三節で言及した「悪」の問題について、我々は意図的にこの問題への深入りを避けた。『ファウスト』という足場を越え出て、あと一步、人智学の深みへと立ち入るならば、我々はたちまち、その特異性の渦に呑み込まれてしまう。人智学のさらなる深みへと降りていくことは、『ファウスト』だけでは不十分なのである。けれども、本論ではゲーテの足場を用いて、シュタイナー思想に可能な限り接近し、そこから人智学的「自由」とは何か、その基本構造を抽出することができた。ここで取り出したのはあくまで、その骨子となる構造だけではあるが、それを確認することで、「自由」の獲得を目指す人智学的人間形成論の大枠を描き出すことができたように思われる。

¹Steiner,R. 1983:Blut ist ein ganz besonderer Saft,In:Die Erkenntnis des Übersinnlichen in unserer Zeit und deren Bedeutung für das heutige Leben : dreizehn öffentliche Vorträge, gehalten zwischen dem 11. Oktober 1906 und dem 26. April 1907 im Architektenhaus zu Berlin, Rudolf Steiner Verlag,Dornach,S.35.

² Steiner,R. 1999:Das 《Märchen von der grünen Schlange und der schönen Lilie》 von Goethe interner Vortrag Köln,27.November 1904, In:Goethes geheime Offenbarung in seinem Märchen von der grünen Schlange und der schönen Lilie, Rudolf Steiner Verlag, Dornach,S.118

³ Steiner,R. 2002: Anthroposophie und Kunst,In:Das Künstlerische in seiner Weltmission : der Genius der Sprache : die Welt des sich offenbarenden strahlenden Scheines : Anthroposophie und Kunst : Anthroposophie und Dichtung : sechs Vorträge, gehalten in Dornach vom 27. Mai bis 9. Juni 1923 : zwei Vorträge, gehalten in Kristiania (Oslo) am 18. und 20. Mai 1923,Rudolf Steiner Verlag,Dornach,S.114.

⁴ 本論で用いる「人智学的」という表現について。シュタイナーは1912年に人智学協会を設立し、厳密にはそれ以降、自身の思想を「人智学」と呼ぶのであるが、本論では、ゆるやかに「人智学」を「シュタイナー思想」と同義で用いることにする。

⁵ Wilson,C. 2005:Rudolf Steiner : the man and his vision,Aeon,London,p.89.

⁶ Steiner,R. 2003:Grundlinien einer Erkenntnistheorie der Goetheschen Weltanschauung mit besonderer Rücksicht auf Schiller,Rudolf Steiner Verlag,Dornach,S.11.

⁷ Ibid.

⁸ Steiner,R. 1999:Goethes Weltanschauung,Rudolf Steiner Verlag,Dornach,S.214.

⁹井藤元 2009:「シュタイナーのゲーテ『メールヒェン』論—ゲーテ、シラー、シュタイナーの思想的邂逅—」、『ホリスティック教育研究』第12号、ホリスティック教育協会、及び、井藤元 2009:「シュタイナーとゲーテ『メールヒェン』—『メールヒェン』解釈に秘匿されたシュタイナーの人間形成論—」、『臨床教育人間学』第10号、京都大学大学院教育学研究科臨床教育学講座。

¹⁰ シュタイナーは1899年に執筆した『メールヒェン』論(「ゲーテの黙示」)を加筆修正し、1918年、『ファウスト』論と共にこれを発表した。

¹¹ しかしながら、当然ではあるが、『ファウスト』論分析を通じて人智学の全体像が網羅的に解明されるわけではないということに予め留意すべきである。人智学的諸理念は、『ファウスト』を大きく超え出る要素を多分に含んでおり、それらをあますところなく捉えることは不可能である。本研究の一つの課題は、ゲーテを通じてシュタイナーの思想をどこまで語ることができるか、その限界を見定めることにある。従って、以下の論考では、ゲーテ的世界観を超え出て、シュタイナー思想そのものに深く立ち入らねばならない問題(とりわけ「悪」の問題)に関しては、大綱のみの論述に留めた。

¹² Paul Marshall Allen & Joan Deris Allen 1995: The Time Is at Hand!: The Rosicrucian Nature of Goethe's Fairy Tale of the Green Snake and the Beautiful Lily and the Mystery Dramas of Rudolf Steiner, Rudolf Steiner Pr., USA, p.55.

¹³ Freeman,A. 1947:Goethe & Steiner,Sheffield Telegraph & Star Ltd, Sheffield.

¹⁴ Koepke,E. 2002 :Goethe, Schiller und die Anthroposophie. Das Geheimnis der Ergaenzung, Freies Geistesleben GmbH,Stuttgart.

¹⁵ ファウストは、あらゆる学問を修めたにもかかわらず、自身が一向に賢明になっていないことを嘆き、愕然とする。

¹⁶ Steiner,R. 1989a:Goethes Geistesart in ihrer Offenbarung durch seinen Faust,In:Goethes Geistesart in ihrer Offenbarung durch seinen Faust und durch das Märchen von der Schlange und der Lilie,Rudolf Steiner Verlag,Dornach,S.46.

¹⁷ Goethe 1972:Faust, C.H.Beck Verlag, München,S.22.

- 18 Steiner 1989a, S.45.
- 19 *Ibid.*, S.61.
- 20 ファウストの求めに応じて地霊が出現するのであるが、彼は、この地霊を自分の似姿と感じている。
- 21 Goethe 1972, S.24.=1958: (相良守峯訳)『ファウスト』第一部、511 行、岩波書店、42 頁
- 22 *Ibid.*=同上、512-513 行
- 23 *Ibid.*=同上、514-515 行、42-43 頁
- 24 ファウストが「地霊」からの返答に愕然とし、崩れ落ちた瞬間に、部屋に助手のワーグナーが入ってくる。ワーグナーは、知識の世界のみを追求する者であり、生命の躍動とは無縁の人物である。
- 25 「市門の外」の場面では、書齋から出たファウストが、助手ワーグナーと共に生命の躍動に触れる。
- 26 Steiner 1989a, S.49.
- 27 ここではメフィストがファウストの身代わりとして大学生に会い、教訓を施す。この学生は、知識の量的拡大にのみ向かっており、ファウストが今後目指す世界とは対極の領域に羨望を抱いている。
- 28 Goethe 1972, S.62.=1958、1899 - 1900 行、127 頁
- 29 *Ibid.*, S.65.=同上、2023 行、135 頁
- 30 *Ibid.*, S.66.=同上、2038-2039 行、136 頁
- 31 Steiner 1989a, S.51.
- 32 *Ibid.*
- 33 人智学における「悪」の問題に関しては、『悪の秘儀 アーリマンとルシファー』（松浦賢訳、イザラ書房、1995 年）を参照。
- 34 シュタイナーによれば、そうしたメフィストの二重性はゲーテ自身によっては意識化されていなかったという。[Steiner 1989a, S.56.]
- 35 Goethe 1972, S.18.=1958、320 - 321 行、28 頁
- 36 尤も、最終場面において、メフィストはファウストの魂を求めており、決して死骸を求めているわけではない。従って、シュタイナーの解釈が成立するかどうかについては慎重な検討が必要である。けれども、本研究はシュタイナーの『ファウスト』解釈の妥当性を論じたものではない故、彼の解釈の妥当性については不問に付すこととする。
- 37 第二部でファウストは、神聖ローマ帝国の皇帝により、絶世の美男美女パリスとヘレナを呼び出すよう命じられる。メフィストは、「母たちの国」から二人の霊を連れ出せば良いとファウストに明かす。
- 38 Steiner, R. 1989b: Goethes Faust als Bild seiner esoterischen Weltanschauung, In: *Goethes Geistesart in ihrer Offenbarung durch seinen Faust und durch das Märchen von der Schlange und der Lilie*, Rudolf Steiner Verlag, Dornach, S.27.
- 39 *Ibid.*, SS.27-28.
- 40 *Ibid.*, S.28.
- 41 Steiner, R. 2000 : *Mein Lebensgang : eine nicht vollendete Autobiographie ; mit einem Nachwort hrsg. von Marie Steiner (1925)*, Rudolf Steiner Verlag, Dornach, Schweiz, S.364.=2009 : (西川隆範訳)『シュタイナー自伝 (下)』、アルテ、103 頁
- 42 Steiner 1989a, S.61.
- 43 *Ibid.*
- 44 Steiner, R. 1960: *Die Mystik im Aufgange des neuzeitlichen Geisteslebens und ihr Verhältnis zur modernen Weltanschauung*, Rudolf Steiner Verlag, Dornach, S.36.
- 45 *Ibid.*, S.37.
- 46 こうした「自由」の理念は、シュタイナーが甚大なる影響を受けたシラー哲学における「自由」を思い起こさせる。シラーにおける「自由」に関しては拙稿を参照。[井藤元 2007:「シラー『美的書簡』における「遊戯衝動」ーゲーテ文学からの解明ー」、『研究室紀要』第 33 号、東京大学大学院教育学研究科教育学研究室 及び 井藤元 2009:『『崇高論』によるシラー美的教育論再考ーシラー美的教育論再構築への布石ー』、『京都大学大学院教育学研究科紀要』第 55 号、京都大学大学院教育学研究科]
- 47 Steiner, 1960, S.37.
- 48 『ファウスト』論における「自由」の理念は、シュタイナーの名著『自由の哲学』との関連において読み解かれるべきである。本論考では紙幅の都合上遂行できなかったが、両者の比較検討は人智学的「自由」の内実を、より体系的に理解する上で不可欠である。この問題については別稿を用意する。

本研究は平成 21 年度日本学術振興会科学研究費補助金（特別研究員奨励費）の助成を受けたものである。

（日本学術振興会特別研究員 臨床教育学講座 博士後期課程 2 回生）
 （受稿 2009 年 9 月 7 日、改稿 2009 年 11 月 30 日、受理 2009 年 12 月 11 日）

**R. Steiner's Interpretation of *Faust* :
To Elucidate Steiner's Philosophy of *Freedom***

ITO Gen

The objective of this paper is to analyze Rudolf Steiner's interpretation of Goethe's *Faust*, to elucidate Steiner's Philosophy of *Freedom*.

As we have seen, each analyst has produced a different interpretation of *Faust* up to now. Frequently, analysts project their own thinking about *Faust*. Steiner has also projected his ideas on *Faust*, so through the analysis of his understanding, we can read his interpretation of *Faust* into his own thoughts. Steiner was a student of Goethe's natural scientific studies in his time. He was outstanding in scholarship, but around the turn of the century, he became an occultist. His essays on *Faust* were written after that time, and I think these essays express Steiner's own ideas. Their contents are as follows. For example, Steiner interpreted that in the opening scene in *Faust*, the harmony of the universe is revealed to Faust by the sign of the macrocosm. Steiner says, that Faust defected from the macrocosm because for him it is no more than a "show." But in the second part of *Faust*, macrocosmic events enter into connect with human experiences. Finally, in the epilogue of *Faust*, the "show" became Life. Through harmony with macrocosm, Faust acquired true freedom.